

多様性の中で 守るべきもの

千里 井上 暎夫

今から二五年前、私がガバナーだった時（二〇〇二―〇三年度）、公式訪問で「これからのクラブはどのクラブも金太郎飴あめのようでは駄目だ」と説いて回りました。かつて、クラブの奉仕は四大奉仕を満遍なく行うことが推奨されていたのですが、当時の国際ロータリー（R

I）会長ビチャイ・ラタクル氏の「ロータリーはクラブが主体」という主張と、「決議二二三―三四」の奉仕の自主性を根拠に、クラブの特色を出さなければ将来はない、と思ったからです。これも「Making a Difference」でしょう。

わが地区は大阪市を含む大阪北部の狭い地域に八六クラブ（当時）がひしめき合う中、会員数減少のトレンドのもとで、中規模、小規模のクラブほど会員数が減少した現実があり、歴史があり、会員数の多いクラブに押され、埋没するのではと危惧したからです。

地区としてはクラブの所在地域をなくし、クラブを創立して会員数を増やすなど、方法はいろいろありますが、多様性や合併で活路を見いだしたいと思っていました。

その後、ロータリーコーディネーターに指名され、シカゴで三度研修を受けました。多様性についての議論の中で、世界では会員の多様性のことを指していると知りましたが、日本の特性を考え、クラブの多様性として主張したところ、彼らはよく理解してくれました。

昨年の規定審議会での規定改訂で、クラブの多様性が現実となってきたことを痛感しております。カルロ・ラビッツァ元RI会長（一九九九―二〇〇〇年度）が、クラブを信用し、多くのことをクラブに任せられた方がよい、と語ったことを思い出します。

クラブの主体性はこれからますます進化するものと思います。会員増強の路線の中では、入会を希望する人々がクラブを選ぶ時代になるでしょう。そこで、おのおののクラブが生き残る作戦や戦略を持たねばなりません。さて、そう

なるとクラブは何が大切でしょうか。ロータリーのアイデンティティーを守ることに尽きると考えます。職業奉仕、職業分類の原則を失えば、この団体は数ある奉仕団体の中に埋没すると語ったビル・ハントレー元RI会長（一九九四―九五年度）の言葉をいま一度肝に銘じ、このことを守りながらクラブは自主性を享受しなければならぬと強く感じております。

（第266〇地区 大阪府 税理士）